

臨時監査「教育」報告書

監事計画に挙げた3つの重点項目について、項目ごとに対象部門を選定し、書面調査と面談によって監査を実施した。それぞれの監査の概要と監事意見は以下のとおりである。

【教育に関するテーマ】

- A：高大接続の強化への取組
- B：入試改善への取組

監査項目と主な監査内容

監査項目 A：高大接続の強化への取組

優秀な入学生の確保を目指して各学部が取り組んでいる高大連携・接続の現状とその強化に向けた実施体制や検討状況についての監査

監査項目 B：入試改善への取組

従来京都大学における入試（前期入試）に加え、平成28年度に新たに実施予定の「京都大学特色入試」に向けての各学部での準備状況や実施体制の取組状況に関する監査

監査の方法

1 監査の方法

既存資料等により書面調査を行うとともに、予め通知した質問項目にしたがって調査対象部局長、本部部長、担当教員、事務担当者に面談することにより監査を実施した。

2 監査の実施先

(1) 経済学部	7/31(木)
(2) 学務部	8/5(火)
(3) 国際高等教育院	8/6(水)
(4) 工学部	8/7(木)
(5) 医学部	8/27(木)
(6) 理学部	9/1(月)

監査結果

【全学の取組 - 学務部】

A 高大接続の強化への取組

1 各県の教育委員会との連携協定締結及び協定に基づく高大連携事業の実施

大学及び高等学校における教育の課題に関し、教育委員会と連携して必要な対応を行い、教育及び研究の充実・発展に資するもので、以下のような事案を実施する。

- (1) 高校生を対象とする多様な学習機会の提供
- (2) 京都大学学生による学校教育活動への支援の推進
- (3) 教育及び研究上の諸課題に対応した調査研究の実施
- (4) その他双方が連携に必要と認める事項

1.1 過去3年間の取組実績

1.1.1 大阪府教育委員会（平成 24 年 2 月、協定締結）

- (1) 平成 24、25 年 8 月に大阪府立高等学校「進学指導特色校 10 校(GLHS)」の生徒を対象とした「京都大学ウルトラレッスン」を実施（参加者：平成 24 年 35 名、25 年 44 名）
- (2) 平成 24 年、25 年 10 月に大阪府内のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)校を対象とした「大阪サイエンスデイ」の実施に協力(参加者:平成 24 年約 1,200 名、25 年約 2,000 名)
- (3) 平成 24、25 年 12 月に GLHS 校の生徒を対象とした「京都大学キャンパスガイド」を実施し、GLHS 校生徒による研究発表に対する本学教員の指導助言並びに文系・理系の講演会、各学部による模擬授業や学部紹介を行い、本学への憧れや関心を高めることができた。(参加者：平成 24 年 444 名、25 年 478 名)

1.1.2 滋賀県教育委員会（平成 25 年 5 月、協定締結）

- (1) 平成 25 年 8 月に連携指定校の生徒を対象とした「京都大学アカデミック・キャンパス体験事業」を実施し、本学教員による講義と博物館の見学案内・キャンパスツアー並びに本学学生も交えた座談会を実施した。(参加者：49 名)
- (2) 平成 25 年 12 月に連携指定校の生徒を対象とした「琵琶湖の生態系の研究体験ツアー」において、本学の生態学研究センターにて、教職員による実験、実習並びに講義を実施した。

1.1.3 京都府・京都市教育委員会

平成 17 年 11 月に京都府教育委員会と、平成 19 年 6 月に京都市教育委員会と連携協力に関する協定を締結し、「京都数学グランプリ」、「ジュニアキャンパス」等の幅広い交流を進めてきた。これらの事業を土台として、高大接続や高大連携の視点を盛り込んだ新たな連携協定を平成 26 年 2 月に再締結した。6 月 15 日には「京都サイエンスフェスタ」を時計台記念館にて開催した（申込数 800 名以上）。

1.1.4 和歌山県教育委員会

平成 23 年 3 月に和歌山県教育の充実・発展と教育学研究科の研究・教育の推進をめざして、教育学研究科との連携協定を締結した。本学から派遣された教員による講義や本学への研修ツアー等を通じて、高校生に多様な学びの機会を提供。また、総合的な学習や生徒指導などの領域において、臨床心理・教育方法・生涯学習など様々な分野の大学院生等が継続的に訪問し、問題把握や問題解決の糸口を探ってきた。これらの活動を土台として、高大接続や高大連携の視点を盛り込んだ新たな連携協定を平成 26 年 3 月に締結した。

1.1.5 東京都教育委員会

平成 23 年より「高校生フォーラム in Tokyo」に取り組む。東京都教育委員会との間で覚書きを交わし、昨年までに計 3 回開催（参加者：600 名以上）。山中伸弥 iPS 細胞研究所所長、松沢哲朗霊長類研究所所長、松本紘総長の講演を実施した。これらの活動を土台として平成 26 年 1 月に高大接続や高大連携の視点を盛り込んだ新たな連携協定を締結した。

1.1.6 その他の連携協定締結教育委員会等

- (1) 兵庫県教育委員会：平成 26 年 1 月
- (2) 奈良県と連携協定締結：平成 26 年 4 月
- (3) 三重県教育委員会：平成 26 年 5 月
- (4) 石川県教育委員会：平成 26 年 7 月

(5) 徳島県・徳島市教育委員会：平成 26 年 8 月

(6) 福井県教育委員会：平成 26 年 8 月

2 学びコーディネーター事業

平成 25 年度から高大接続事業のひとつとして、博士後期課程・ポスドクの学生等を高校へ派遣する出前授業や本学を訪問する高校生にオープン授業を行う「学びコーディネーター」授業を開始した。

平成 25 年度は 26 名の大学院生等により 45 講座開講し、北海道から沖縄まで申込数約 120 校、出前授業延べ 115 回、オープン授業延べ 8 回実施した。さらに、入試企画課職員が出前授業を行う多くの高等学校に同行し、出前授業について助言をすると共に大学紹介を行って本学への関心を高めることに努めた。

3 高等学校への教職員の派遣

高等学校、教育委員会、予備校等から本学に対して、模擬授業や大学説明会などの講師派遣の要請が多く寄せられている。高等学校等が希望する関連分野の研究科の教員に依頼をしたり、特に希望が無い場合は学部の輪番で出前授業をお願いし、実施している。また、大学紹介、入試制度等については、入試企画課職員が当該校に赴き、説明・紹介を実施している。

・平成 24 年度：派遣教員 24 名、職員 1 名

・平成 25 年度：派遣教員 33 名、職員 4 名

・平成 26 年度：派遣教員 19 名、職員 5 名

(平成 26 年 7 月 31 日現在)

4 京都大学サマースクール 2014

連携協定を締結した連携指定校の高校生を対象に、本学主催の「京都大学サマースクール 2014」を「夏の暑い 1 日、京大生になろう!」をキャッチフレーズとして 8 月 19 日に百周年時計台記念館等で開催した。

B 入試改善への取組

1 「京都大学特色入試」において求める人物像

平成 28 年度導入予定の「京都大学特色入試」(以下、特色入試と記す。)において、京都大学が求める人物像は、高等学校における幅広い学習に裏付けられた総合力と学ぶ力及び高い志を持ち、個々の学部が定めたカリキュラムと教育コースを受けるにふさわしい学力と意欲を備えた者としている。

・各学部が求める人物像

総合人間学部：文理両道に秀でた人材

文 学 部：深い専門知識と広い教養を備えた真に新しい文化創造の担い手

教 育 学 部：学習を深め、探求活動を行い、卓越した学力を身につけ成果を挙げた者

法 学 部：世界・国家・社会の様々な問題に対する強い関心を持ち、多方面にわたる基礎的な学力を備え、論理的思考力に優れた者

経 済 学 部：柔軟な思考と創造性、高い自学自習の能力を持つ人

理 学 部：自ら考え、新しい知を吸収し、想像する姿勢を持ち、粘り強く問題

解決を試みる人

医学部医学科：社会が大きく変革している時代においても、世界をリードできる医学研究者としての資質・適性を持つ人

医学部人間健康科学科：多面的かつバランスのよい思考力で、課題や問題を抽出し、解決していく医療のエキスパートとなり得る人

薬学部：創薬に関する幅広い分野において、将来、研究者として国際的に活躍することのできる人

工学部：将来、世界を牽引するグローバルリーダーとなりうる特筆すべき能力、リーダーシップと高い基礎学力を持つ人

農学部：高度な専門知識を持って社会のリーダーとなるべき人材となっている。

2 「特色入試」による選抜方法

特色入試では、高大接続と個々の学部の教育を受ける基礎学力を重視し、

- (1) 高等学校での学修における行動と成果の判定を実施。これについては「調査書」に加え、高等学校長等の作成する「学業活動報告書」等により、高等学校の学修における行動や成果を丁寧に評価する。また、志願者が作成する「学びの設計書」をもとに高等学校での活動内容から本学において何を学びたいのか、卒業後どういった仕事に就きたいのかといった、志願者自らの学ぶ意欲や志について書類審査を通して評価する。
- (2) 個々の学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力の判定を実施。これについては、書類審査に加えて、大学入試センター試験の成績、学部ごとの能力測定考査、論文試験、面接試験、口頭試問等を組み合わせて実施することにより、学部が定めたカリキュラムの内容を修得するのに必要とされる基礎学力や個々の学部における教育コースにとって望ましい能力を見る。

3 「特色入試」の導入に向けた準備と体制

3 - 1 「入試改革検討本部」の設置

平成 24 年 11 月に「入試改革検討本部」を設置し、専門的知識を有する人材を採用し、特色入試の実施に向け業務を遂行している。入試開発室においては「調査書」の分析を行い、高等学校レベルや地域制に基づいた「調査書」における学習成績概評の評価基準の相違点について調査結果を公表した。

3 - 2 「特色入試実施準備委員会」の設置

平成 25 年 4 月に教育担当理事を委員長とする「特色入試実施準備委員会」を設置し、平成 28 年度入試からの導入に向けた具体的な制度設計を進めている。

3 - 3 「特色入試実施委員会」の設置

平成 26 年 10 月に「特色入試実施委員会」を設置し、具体的な検討に入る予定である。なお、「特色入試実施委員会」の設置に伴い、「特色入試実施準備委員会」は廃止する。

3 - 4 入試広報

特色入試の趣旨を理解し、本学学部が望む人材に出願してもらうためには、特色

入試の趣旨や選抜方法等を周知する丁寧な入試広報が必要である。また、よりよい特色入試にするには、高等学校の現場からの意見が重要である。そのため、特色入試のポイントを掲載したパンフレット 20,000 部を作成し、進学ガイダンスやオープンキャンパスで配布する。また、連携協定を締結している連携指定校 128 校、本学への入学実績が高い高等学校 110 校、合計 238 校に対して特色入試に関するアンケート調査を行い、各種の意見を参考にしている。さらに、高等学校の進路指導教員を対象に入学者選抜方法の説明や意見交換を実施している。

3 - 5 サンプル問題の作成

初めて実施する特色入試であることから、入試情報をできる限り発信することにより、多くの出願者獲得を目指し、その一環としてのサンプル問題を作成し、年度内に公表する予定である。

現在、各学部でアンケート等を参考に検討中である。

3 - 6 選抜要項及び募集要項の発表

平成 26 年 3 月 26 日の特色入試選抜要項（概要）発表後、各学部及び委員会においてさらなる具体化に向けた検討を進めてきたが、いくつか改善すべき課題が出てきており、選抜要項の改訂版を年内に作成の予定である。

実施年度である平成 27 年度においては、選抜要項の確定版を 3～4 月に、提出書類を含めた募集要項を 7 月に作成、発表する予定である。

【全学の取組 - 国際高等教育院】

A 高大接続の強化への取組

1 初年次教育の強化

本学に入学した学生が高等学校での教育から大学教育にスムーズに移行することができるように、入学後の初年次教育を強化するため、平成 25 年 6 月に少人数教育・初年次教育検討 WG を企画評価専門委員会に設置し、報告書「少人数教育と初年次教育の改善に向けて」を作成した。また、平成 25 年 12 月には、初年度教育 WG を設置し、報告書「初年次教育 WG まとめ」を作成し、

- (1) 新入生向けガイダンスと時間割構成の支援の改善
- (2) 履修困難を抱える学生の支援強化
- (3) 継続的セミナーなどの実施
- (4) オナーズ型プログラムの把握と情報提供などを提言した。

2 高等学校での履修状況に配慮した科目設計

自然応用科学系科目群を中心に、高等学校の学習指導要領改訂や科目選択状況に配慮した科目設計を進めた。

- (1) 指導要領改訂に伴い、数学の科目内容及びシラバスの改訂を行った。
- (2) 高校教科書を購入し、化学の科目のレベル設定を検討した。
- (3) 高等学校での履修状況に配慮した生物の科目設計を行った。
- (4) 情報については、高等学校での履修状況を確認したうえで検討する。

【部局の取組 - 経済学部】

A 高大接続の強化への取組

1 出前講義による高大接続

全国の高等学校、予備校、教育委員会などから経済学部へ依頼のあった出前講義に積極的に対応し、高大接続の充実と強化を実施してきた。平成 23 年度 16 校、平成 24 年度 17 校、平成 25 年度 22 校に対し模擬講義、特別講義、大学及び学部案内、大学及び学部紹介などを実施した。

B 入試改善への取組

1 経済学部が「特色入試」に求める人物像

経済学部は、総合的な学力とともに、長文読解力、問題発見力、論理的思考、柔軟な思考と創造性、そして高い自学自習の能力を持つ人材を求めている。

経済学は、社会を経済の観点から理解しようという実証科学であり、経済を変えることで社会を改革しようという政策科学である。経済学を学ぶためには、社会科学の古典を読み、そこから現代社会を分析する視点を抽出し、独自の社会分析をすすめ、社会問題を解決する政策を立案することが求められる。

2 他部局とは異なる特徴

今回の特色入試は、特に京都大学経済学部独自の「論文入試」の伝統を継承するもので、他大学・他部局に見ない特徴、すなわち、古典文献を主に取り上げ、受験生の意見ではなく、テキストをいかに読み込み思考できるかを問うものとなっていること、かなりの長文のテキストを読ませて考察させるものとなっていることなどを持っている。

3 「特色入試」導入に向けた準備とスケジュール

経済学部では、「経済学部特色入試 WG」を設置し検討を進めている。

3 - 1 平成 26 年度

- (1) 経済学部の特色入試についての高等学校への説明会・広報を実施
- (2) 試験問題サンプルの作成
- (3) 試験会場等の調整

3 - 2 平成 27 年度

- (1) 入試要項の作成・広報
- (2) 入試問題の作成・点検・印刷
- (3) 出願受付・一次審査
- (4) 二次試験の実施・採点
- (5) 合格判定・合格通知

【部局の取組 - 理学部】

A 高大接続の強化への取組

1 体験型学習講座 (ELCAS) 及び JST グローバルサイエンスキャンパス (GSC) 事業

平成 20 年度より部局独自事業として、全教員参加体制のもと、「最先端科学の体験

型学習講座 (ELCAS)」を継続実施してきた。平成 26 年 10 月より JST グローバルサイエンスキャンパス (GSC) 事業により、全学的な高大接続への取組を行っている。本事業は、毎年 300 名程度の高校生が参加する半年間の講座で、うち 40 名程度は隔週土曜日に体験学習コースに参加する。これまで修了者の約 1/3 が本学理系学部に入学者、他もほぼ全員が主要研究大学に入学者している。

2 出前授業及び各種イベント

スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 等の出前授業を多数実施しているほか、「女子中高生のための関西科学塾」(5 大学連携事業、平成 25 年度は延べ約 1,000 人が参加)、教育委員会との共催・連携・後援事業 (年 30 回程度)、学内外での科学普及イベント (年数回) の主催等を行っている。また、数学オリンピック出場者等を全国から招き、「数学の森 in Kyoto」を平成 24, 25 年度と開催し (参加者数は各年 50 名強)、平成 26 年度も開催予定である。

3 国際活動における高大接続

- (1) 日英サイエンスワークショップによるイギリスの高校生受け入れ。英語による講義及び実験・実習指導
- (2) 科学コミュニケーション研究者 (オーストラリア国立大学科学意識向上センター所長 Prof. Stocklmayer および Dr. Perera) 受け入れ、英語による講義、iCeMS との共同セミナー実施

B 入試改善への取組

1 理学部が「特色入試」に求める人物像

理学は自然現象を支配する原理や法則を探求する学問であり、その活動を通じて人類の知的財産としての文化の深く大きな発展に資するとともに、人類全体の生活向上と福祉に貢献する知的営為である。理学部は自由な学風の下で将来の理学の創造、発展、応用、普及のための能力、知識を身につけることができる学生を求めており、特色入試で求める人物像の主要部分は、理学部のアドミッションポリシーで謳っている人物像そのものである。特色入試では、特に数理科学の分野において極めて優れた才能を持つ者を求めているが、数理科学 (数学) は特に早くから才能が発揮される学問分野としてもよく知られており、これまでの入学者の中にもそのような人物が多く見られたことから、本特色入試がそのような人物を選抜できると確信される。

2 他部局と異なる特徴

本特色入試において、理学部が他部局と異なる特徴は、数理科学の分野を特に取り上げていることと、選抜方法を明確な学力型 AO 入試にしていることである。数理科学の分野では、その能力を測るのは能力測定検査が最も確実であり、それと面接審査を特に重要視している。その前提としての書類選考では、応募者が数理科学の分野に特に興味を持って独自の活動を行って成果を得ている点を確認して、学校での与えられた学習にとどまらない自主性を評価したいと考えている。

3 「特色入試」導入に向けた準備とスケジュール

特色入試での書類選考や能力測定検査での作業手順や人員配置などを想定して、特

に数理科学の分野の優秀な高校生を対象として、平成 24 年度から「数学の森 in Kyoto」という事業を実施しており、そこでのノウハウに基づいて特色入試の実施方法を検討中である。又、全学の特色入試実施準備委員会での作業に従って、サンプル問題の作成などにも取り組んでいる。

【部局の取組 - 医学部医学科】

A 高大接続の強化への取組

1 出前授業や講演会などによる高大接続

医学部・医学研究科、放射線生物研究センター、化学研究所、物質・細胞統合システム拠点、iPS 細胞研究所初期化機構研究部門等を中心に関西地区の連携高等学校へ要請に応じて出前授業、特別講義、講演会や医学部、研究所の紹介及び案内を行うとともに、研究室訪問を通して見学及び実習も数多く実施している。近年は関西地区だけでなく関東、四国地区の高等学校からも要請が増えている。なかではスーパーサイエンスハイスクール事業を通じた講義や実習のほか、教授と高校生との懇談会も実施しており、高校生の関心は極めて高い。(平成 24, 25 年度の高大連携活動は延べ 58 校、参加学生数は約 11,000 名を超えている。)また、京都大学オープンキャンパス(平成 26 年 8 月 7 日開催)において、医学部の紹介と各種の講演を実施するとともに、昨年度より附属病院と連携した実技体験を新企画として実施している。

B 入試改善への取組

1 医学部医学科が特色入試に求める人物像

医学部に入学してくる学生の出身校については、近年、極度に有名私立進学校への偏重が見られる。優れた人材は確保できているものの、ユニークな京都大学らしい人材が減少している。また、国内において基礎医学研究者を目指す人材の枯渇が問題となっている。

今回の特色入試により、学力だけではなく科学的好奇心に溢れたユニークな人材、世界の医学をリードするような医学研究者としての資質・適性を持つ人材を求める。すなわち、次のような人材を選抜したい。

- (1)科学的好奇心を持ち自学自習のできる、人格に優れた人材
- (2)世界をリードする基礎研究者、臨床研究医を目指す人材
- (3)グローバル時代の医学研究、臨床のリーダーとなり得る人材

2 他部局とは異なる特徴

現行の点数重視の入試と異なり、大学入試センター試験を利用せずに選抜を行う。第 1 次選考で 20~25 名を選考し、第 2 次選考の小論文試験では知的能力を見るために、基礎知識に基づいた論理的思考力、発想力、文章構成力等を評価、面接試験においては受験者 1 名につき 4 回面接を実施し、基礎医学研究者としての素養、適性を多角的に評価する。また、高校 3 年生以外に、傑出した能力を有する高校 2 年生に出願資格を与える。さらに、本特色入試で入学した後、医学研究者、Physician-Scientist を目指す学生(MD-PhD プログラムに参加)には、奨学金を与え、余裕を持って研究活動に従事できるように配慮する。

3 「特色入試」導入に向けた準備とスケジュール

医学部医学科における特色入試の実施準備に関する必要事項を審議及び調整を図るために、医学部特色入試実施準備委員会を設置している。現在、小論文問題の作成及び面接試験の方法について検討をすすめている。スケジュールについては、平成 26 年 9 月上旬にサンプル問題素案作成、12 月末までに面接試験方法、評価の詳細を検討し、平成 27 年 5 月末までに面接試験方法のブラッシュアップを行う予定である。

【部局の取組 - 医学部人間健康科学科】

A 高大接続の強化への取組

本学科は発足して約 10 年経過したところで、高大接続の実績はまだほとんどない状況である。平成 25 年 7 月に京都市立堀川高校（高校生 15 名、教員 3 名）を検査技術科学専攻に受け入れ、研究室紹介及び見学、教員及び学生との懇談会を実施した。また、平成 26 年 10 月大阪府立茨木高校において「学問発見講座」に参加し、「脳の働きから心の問題を考える」と題して講義を行った。（参加者 38 名）今後、高大接続を組織的に検討し、本学科が求める医療従事者・医療専門職及び将来の健康科学を発展させる優秀な人材確保のためにも、本学科の教育・魅力を高校生に発信していく必要があると考えている。

B 入試改善の取組

1 医学部人間健康科学科が「特色入試」に求める人間像

本学科は看護師、保健師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士という国家資格をベースに、国際的視野を兼ね備えた医療従事者・医療専門職のリーダーや研究者の養成を推進しており、多面的かつバランスの良い思考力で、課題や問題を抽出し解決していく医療のエキスパートとなり得る人材を求めている。特色入試では、第一次選考において、調査書、学業活動報告書、学びの設計書等を確認することにより、高校生活における学修の姿勢や本学科を希望する理由を評価する。第二次選考においては、論文試験で学問に対する探究心と人間に対する深い洞察力や課題解決力などについて評価し、面接試験で医療従事者・医療専門職のリーダーや研究者としての適性・人間性について評価する。

さらに、センター試験を課すことにより基礎学力を担保し、特色入試を通じ、一般入試では獲得できない人材を確保できる。

2 他部局とは異なる特徴

本学科の学部教育は看護師、保健師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士という国家資格を取得するためのカリキュラムが組まれているのが特徴的である。それを踏まえ、近年の医療で特に推進されている「チーム医療」に積極的に参加してリーダーシップを発揮できる医療従事者・医療専門職として、患者中心の医療を進めるために必要な共通理念・方法論を学習し、その基礎の上にとって高度先進医療に対応でき、国際的にも将来の医療を担うことのできる人材を育成する。

3 「特色入試」の導入に向けた準備とスケジュール

本学科では特色入試検討 WG を設置して検討を進めている。平成 26 年 9 月初旬までにサンプル問題、論文試験・面接試験評価基準のたたき台を作成する。また、今後 AO 入試を実施している主要な国立大学に出張し、入試担当教員に直接話を聞くことによ

り、出題方法、採点、面接、評価の方法などについて情報収集を行い準備の体制に万全を期す。

【部局の取組 - 工学部】

A 高大接続の強化への取組

1 高校等への出前講義、実験・実習及び見学会等の実施

関西、近畿地区の小中高等学校を中心に多数の出前講義、講演会、実験・実習及び生徒との懇談会を実施するとともに、工学部への見学会や実験・実習を行い、工学部の紹介やガイダンスについても積極的に実施している。平成 23～25 年に実施したこれらの高大連携活動は延べ約 160 回に及んでいる。

2 オープンキャンパスの実施

毎年 8 月に実施しているオープンキャンパスへは約 1,700 名の高校生が参加し、工学部各学科の講演、紹介、模擬実験・実習等を体験している。また、工学に関心を持つ女子高校生のために工学部共通企画「テク女子」を実施し（参加者約 90 名）女子高校生への情報発信を行っている。

3 中・高校生のための工学部オープンセミナーの実施

平成 14 年より毎年夏（7・8 月）に工学部オープンセミナーを開催し、平成 24 年からは「ひと・社会・工学 - 工学のいまを知る - 」と題して講義や紹介を行っている。参加定員は 150 名であるが、平成 25 年は 300 名以上の参加であった。

4 グローバルサイエンスキャンパス（GSC）の実施

平成 26 年度文部科学省のグローバルサイエンスキャンパス（GSC）事業に採択され平成 29 年度まで 4 年間（7,500 万円/年）実施されることとなった。本事業は「対話を根幹とした自学自習」に基づき、優れた教育研究資源を積極的に活用した研鑽を通じて、主体的に科学を究めようとする高校生の育成を目的とし、

- (1) “SSH extension”として、高校生のさらなる理系の才能を更に伸ばす。
- (2) 主体的学びと意欲に基づく”active learning”を通じて確かな手応えを高校生に提供
- (3) 高校と大学の協働・共創による傑出した科学技術人材を育成する越境的人材育成へのチャレンジ
- (4) 各連携教育委員会から推薦の 100 名と一般公募（選抜試験有）50 名の高校生を対象

として実施の予定である。第一次選抜の高校生 150 名は月 2 回の前期サイエンスコースワークの講義、後期実験・実習を受講して基盤コースを修了した者のうち、第二次選抜で 20～50 名を選び、専修コースとして、研究室で自分の探求テーマに合う研究者から個別に指導を受けることができるとともに、国内外の科学技術コンテストへの参加や外国語ジャーナルの執筆・投稿へチャレンジして自己の研究を論文としてまとめ、イノベーション力を涵養する。(ELCAS プログラム：Education program for Laureate students with a Cross formed by Academic curiosity and science)。

B 入試改善の取組

1 工学部が「特色入試」に求める人間像

工学部では、基礎学理を重視して自然環境と調和のとれた科学技術の発展を図るとともに、高度の専門能力と高い倫理性、並びに豊かな教養と個性を兼ね備えた人材を育成する教育を行っている。特色入試では、将来、世界を牽引するグローバルリーダーとなり得る特筆すべき能力、リーダーシップと高い基礎学力を持つ人材を求めている。

高校生のときに、通常の受験勉強とは異なる活動（科学技術に関わる活動に限定）に従事しその活動で顕著な実績を挙げた人は、当然、科学技術に対して高い興味と広い視野を持っていると期待できる。また、チームの中心的存在として顕著な実績を挙げた人は、チームを統括するリーダーシップの素養があると期待できる。このような人材を従来の筆記試験のみで選抜するのは容易ではなく、特色入試を通して選抜したいと考えている。

2 他部局とは異なる特徴

高い基礎学力に加えて、顕著な活動実績を有する学生を推薦入試で選考することにより、解答の効率を重視しがちな受験勉強だけでは得られない深い考察力、解析力や実行力を有し自分の力で未来を切り拓くポテンシャルを持つ学生を選抜することができると思われる。また、志望学科を特定した推薦入試方式をとることにより、合格した後は、本人が最も興味を持つ分野で学修、研究することを保証することができる。

3 「特色入試」の導入に向けた準備とスケジュール

工学部長、教育担当評議員統括の下、「工学部特色入試WG」を結成している。WGは工学部長、教育担当評議員および教育制度委員会の助言を受けながら実施に向けた検討を行っている。

- 平成 26 年 7～9 月 : 特色入試の広報イベント開催
- 10 月以降 : 募集要項の最終案の検討
- 平成 27 年 2 月頃 : 募集要項の確定
- 4 月 : 工学部及び各学科の実施委員会立ち上げ
- 4～6 月 : 実施要項の詳細を確定
- 11 月以降 : 実施、選抜

監事意見

テーマA 高大接続の強化への取組

1 全学的な取組について

全学的には学務部を中心として積極的に高大接続や連携への取組を進めている。特に、関西、近畿地区を中心に関東、中国、中部地区の県教育委員会等と連携協定を締結し、各種の講演、講義、実験・実習、各種イベントを共催、実施しており、各教育委員会や高校生の関心も高く、評価は高い。また、これらの活動を通して優秀な高校生が本学への入学を達成しており、成果が挙げられている。今後も、積極的に高大連携活動を京都大学として継続することが必要である。

教育委員会との連携協定は実質的な活動が伴わなければ意味が無いが、連携協定が多くなりすぎて大学本来の教育・研究機能の低下に影響しないように気をつけることが大事である。

国際高等教育院では、高等学校教育から大学教育へ入学生がスムーズに移行できるように、初年次教育のガイダンスに力を入れるとともに、高等学校での履修状況に配慮した科目設計を行うなどして入学生の履修支援を実施しているが、効果が期待される。

2 部局での取組について

今回調査を行った経済学部、理学部、医学部、工学部において、いずれの部局も積極的に高大接続を強化しており、特別講演、出前講義、実験・実習、各種イベントや見学会及び討論会等に多大の貢献をするとともに、参加高校生の関心や評価も高く本学への受験生の増加につながっており、高く評価できる。継続的な活動を望む。

3 高大連携活動に関わる教員の評価及び実施体制の整備について

いずれの部局においても、高大連携活動に参加される教員はそんなに多くはなく、大学としてはボランティア的な参加とみていることもあって、一部の教員に偏る傾向があるとともに、教員にとっては負担と感じる傾向があることも否めない。京都大学にはこれらの教員活動を評価する制度が現在ないようであるが、高大連携の継続的な活動を維持するためにも、教育、研究活動に加え、社会貢献活動の一環として正しく評価し、手当や昇給等への反映による待遇改善について早急に検討するべきである。

さらに、近年、教育委員会や高等学校からの各種の連携活動に対する要請が増加しており、ボランティアとして対応するには人員や経費の点でも課題は大きく、京都大学としての実施体制の整備を早急に検討することが必要である。

テーマB 入試改善への取組

1 「京都大学特色入試」への取組と課題

平成 28 年度の導入に向けて、平成 24 年度に「入試改革検討本部」を設置し、特色入試に関する業務を開始した。平成 25 年 4 月には「特色入試実施準備委員会」を設置し、導入に向けた具体的な制度設計を進めてきた。平成 26 年 10 月には「特色入試実施委員会」を設置し、各部局とも連携して、より具体的、詳細な実施案（募集要項）の作成やサンプル問題の作成等を行うとともに、社会への公表及び広報を行う予定である。各部局ともに順調に準備は進んでいる状況にあり、推移を見守りたい。

「特色入試」の実施にあたっては、高等学校側の協力・支援及び高校生や保護者の理解が必要であるが、平成 28 年の導入に対し何人の応募が来るか未定であるため不安があることと、少人数の入学者受入のために多大の労力を要することをどう評価するか、今後の課題である。